日本精神障害者リハビリテーション学会　第８回ベストプラクティス賞実践報告

「問いと解の螺旋－E-JAN の 20 年とこれから」

Spiral of Question and Answer; Past 20Years of E-JAN and future

大場義貴（おおばよしたか）

Ⅰ　はじめに

私たちは「地域ケアに基づいた精神障害に対する考え方のコンセンサスを持つ」ことを具現化していくために,1993（平成 5）年にメンタルクリニック・ダダ（浜松市）を設立し,設立当初の心理士として勤務した。児童思春期,青年期の方達を主な治療・支援対象とし,医師による薬物療法,精神科デイケア,心理療法を柱とした。徐々に回復してくる当事者が現れ,「働いてみたい」,「一人暮らしをしたい」という声を聞くことが多くなっていった。

しかし,1995（平成 7）年当時,人口約 60 万人の浜松市内で精神障がい者が利用できる施設は,通所授産施設が 1 カ所,作業所,援護寮・グループホーム 0 カ所であった。利用者の回復に伴い,地域での自立した生活を望む訴えを聞く中,私自身もジレンマを抱えると共に,埼玉県のやどかりの里や神奈川県等の先進地との差に危機感を感じ始めていた。同年の精神保健福祉法の,施行後の地域精神保健福祉活動のあり方を考えるために,浜松市・浜北市（平成 19 年合併後の新浜松市）を中心する関係者の有志が集まり,「西遠地区精神保健福祉を実践する会」を立ち上げ,手弁当で夜や休日に勉強会（定例会）を始めた。地域で精神障がい者が元気に生活でき,専門職も活発に仕事ができることを目指し,議論する中で,「援護寮は必要」「生活支援センターも,地域支援では非常に有用」との意見が出された。また,参加していた授産施設の職員から「実家（市の中心部）の土地にグループホームを立ててもいい」と提案されたことで参加者達の気運が高まった（後に,同じ敷地内に E-JAN の事務局を設置）。

「実践する会」は,参加メンバーも市民の 1 人であるとの認識に立ち,「遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（通称：E－JAN）」へと名称を変更し 1997（平成 9）年 12 月に発会した。「心の病を持つ人やその他の障がいを持つ人に対して,その社会復帰や社会参加の支援に関する事業を行い,ノーマライゼーション社会の実現に寄与すること」という目的を共有し,精神保健福祉の課題を自分たちの地域の課題として取り組んでいくという,市民活動としてのあり方を方向づけた。

また,E-JAN と並行して,当事者の「働いてみたい」,「一人暮らしをしたい」を支援するための拠点として「だんだん（援護寮・生活支援センター）」や前述のグループホームの設置の準備が始まり,私は準備室室長として,また,1998（平成 10）年 4 月の開設後は,施設長として勤務した。浜松の遅れた精神保健福祉活動を加速化させていくためには,重装備型の「だんだん」と,ネットワーク型の「E-JAN」の両方が必要であると考えた。「だんだん」に関しては,既に刊行物での報告も多く,学会等でも報告されているので別稿に譲りたい☆[1・2]。

Ⅱ　E-JAN の理念

会の正式名称は,参加者それぞれの思いから「遠州精神保健福祉をすすめる市民の会」という長い名前になった。大切にしたいキーワード,「E（Enshu:遠州）遠州地域をベースに,J（Joyful:楽しく）仲間と共に楽しく,A（Action:行動）考えるよりもまず行動,N（Network:繋がり）人との繋がりを大切に」の頭文字を取り,通称（愛称）を E-JAN とした。「いいね」の遠州弁「いいじゃん」ともかけて,これから始まる長い道のりの掛け声にしていこうという思いもあった。

活動理念は,①精神障がいを抱えているからと言って地域で住みにくい,好きなことを自由にできない状況や,支援される側だけではなく,時には支える側にも立つような,「市民としての当たり前の社会的関係」を地域で営むことができるような地域づくり②精神障がい当事者が,その人らしく生きていけるために,市民ボランティアや家族,精神科利用者,専門職が一体となって,立場や特性を生かして支えあえる地域づくりであり③この活動を通して,地域にこころの健康についての理解や取り組みが広がり,豊かな住みやすい地域になっていくことである。また,約 100 年前,東京帝国大学教授呉秀三は,「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」の中で,「我邦十何万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ,此邦ニ生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」という有名な言葉を残しているが,今の日本ではまだ改善されていない実態に対し,病気や障がいがあっても,住み慣れた地域で生活していけるための活動を推進していきたいという願いから,2007（平成 19）年からは,「コノ地ニ生キル幸セヲ」も理念のひとつに加えている。

Ⅲ　E-JAN の活動

1997（平成 9）年から,2007（平成 19）年までは,地域内で始まった社会復帰施設づくりと,E-JAN の活動が競合してしまうと,生まれ始めたネットワークを分断してしまうと考えたため事業は行わず,他団体支援,普及啓発,人材育成を中心に取り組み,会費や寄付は地域のネットワーク構築のために充てた。①「定例交流会」は,「実践する会」当時から続いているもので,毎月第 2 土曜日に開催。各機関の専門職,市民ボランティア,学生,精神科利用当事者,家族など 20 名ほどが参加し,所属や立場を越えた関係の中で,地域のことや E-JAN について意見交換が行われた（現在は,理事会,管理者会議,交流会,ボランティアクラブと機能分化している）。②「サロン活動」は,ボランティアとメンバーが対等な関係で協力し合い,食事作り,バザー品づくりや準備,クリスマス会や日帰り旅行等を企画し実施している。③「啓発事業（講演会等）」は,当事者も参加できる実行委員会形式で実施。④「運動会」は,社会福祉協議会との共催で,市民ボランティアや学生も参加協力し各機関の精神科利用当事者を招いて実施,同時に災害用アルファ米で炊き出しをして,災害時の食事体験も実施。⑤「コンサート」は,地域で音楽活動を行っている個人や団体に協力し,音楽をとおした交流を 100 人規模で実施。⑥「メンタルヘルスセミナー」は,一般市民を対象に全 5 回で思春期・青年期のこころの健康からうつ病,または精神疾患,精神障がい,社会復帰など,こころの健康に関する正しい知識と理解を促進することを目的として実施。⑦「ボランティア養成講座（委託事業）」は,毎回 30 名程度が受講（現在は浜松市精神保健福祉センターにて実施）。精神保健福祉の現状や体験発表,芋煮会での交流,施設への体験実習など行い,知識と理解,交流体験を通して精神保健福祉に興味関心を持ってもらう機会として実施。受講生の中

には,その後 E-JAN の活動したり,他の団体の活動に参加する人もいる。⑧自主制作ビデオ「くらし」は,2001（平成 13）年度の活動の一環として,地域の社会資源を紹介するために,専門職,当事者,市民ボランティア,学生等と協力して作成された。その後,「くらし」は,大学の授業や精神科病院の病棟内,精神障害者退院促進支援事業,ボランティア養成講座,学習会などでも利用されていった。他に,2006（平成 18）年度「退院促進支援」（県事業）,2007（平成 19）年度「くらし 2」（WAM 事業）と,計 3 本のビデオを作成している。

2002（平成 14）年には,行政の精神保健福祉施策への実践的提言,地域精神保健福祉の推進,地域活動を円滑化,精神障がいへの普及啓発の促進等を目的に特定非営利法人（NPO 法人）を取得し,組織体制を整えた。

Ⅳ　転換期

10 周年を向かえた 2007（平成 19）年 10 月に,「E-JAN 発会 10 周年記念事業　こころの健康と精神障害者の自立や社会参加に関する理解啓発事業～コノ地ニ生キル幸セヲ～」を企画し,地元 FM ラジオ局のライブハウスをギャラリーに仕立て,展示は地元の芸術系大学生,運営は福祉系大学生のボランティアが協力して,全国各地と地元の精神障がい者の絵画の展示会を実施した。併せて,メンタルヘルスセミナーや記念講演会・シンポジウムを実施し,自主製作ビデオ「くらし 2～ココカラハジマル～」を上映した。連日テレビ,ラジオ,新聞等でも取り上げられ,4 日間で約 650 人を動員し,多くの市民や関係者に活動を知って頂く機会となった。また,2008（平成 20）年には,北海道の「べてるの家」を招き,「当事者研究交流集会」を開催した。これがきっかけとなり,精神科利用当事者の世界観を聴いて語る会「じゃんだらにぃ」が誕生し,以降毎年実施している。2011（平成 23）年には,浜松市主催の「浜松市自殺対策推進事業いのちをつなぐ手紙～未来へのメッセージ～」の運営に協力し,市民約 1500 人を招待して,日野原重明氏（聖路加国際病院理事長）にもご参加いただき,ミュージカル「葉っぱのフレディ～いのちの旅～」の上演と,交流イベント「絆～きっとずっとなかま～」を実施した。また,浜松市精神保健福祉センターは,大型ショッピングセンターにて,いのちをつなぐ手紙の展示や音楽イベントなど毎年継続して実施しているが,E-JAN は,同時開催の作品展（平成 21 年度から実施）やパネル展示を担当している。2007（平成 19）年度から,浜松市は 12 市町村が合併し政令指定都市となり,精神保健福祉センターも設置され,この後行政との連携が急激に増えていった。徐々に,精神障がい者の福祉問題と,市民の精神的健康（メンタルヘルス）の保持及び増進は連続性していることが理解され,E-JAN が展開する事業に関心を持ってくれる市民が増えていった。

これらの実績の上に,2009（平成 21）年度以降支援部を設置し,順次職員を配置して,障害者相談支援事業所,ひきこもりサポートセンター,若者サポートステーション,発達支援広場等を開設していった。

Ⅴ　日本精神障害者リハビリテーション学会ベストプラクティス賞を踏まえて

E-JAN は,2015（平成 27）年度,日本精神障害者リハビリテーション学会にて,「第 8 回ベストプラクティス賞」を受賞した。ベストプラクティス賞はわが国の精神保健医療福祉の現状を踏まえ,精神障害者のあるべき姿を展望し,それに到達するためのモデルとなる実践を評価することで,全国での実践の質の向上に寄与することを目的とし,日本精神障害者

リハビリテーション学会が 2008 年より創設した賞である。この機会に,本学会の選考基準になっている 7 項目で構成される「ボストン基準」および学会が独自に加えた 1 つの基準の 8 つの基準に準じて,E-JAN の活動を振り返ることで,活動の概要を紹介したい。

基準 1. 実践の対象は，精神障害のために日常生活および社会生活に相当の援助を必要としている人々である。

E-JAN の実践対象は,地域で暮らす精神障害者であり,さらには,ひきこもり支援やニートの若者支援など市民の心の病の未然防止と,早期から対応する取り組みを幅広く展開している。

基準 2. 実践の焦点は，生活能力の改善にとどまらず，多様な活動と社会参加を目指した実践である。

主な活動は,「Ⅲ　E-JAN の活動」にて述べたため割愛する。

基準 3. 当事者が患者としてではなく社会の一員として迎え入れられ，市民権の回復と擁護につながる活動である。

活動理念は,①「患者としてではなく,市民としての当たり前の社会関係を地域で営むことができるような社会づくり」②その人らしい生き方ができるような社会づくりをするために,ボランティアや家族,ユーザー,専門職が一体となって,こころの健康について取り組み,豊かな住みやすい地域をつくることである。具体的には,市民としての交流機会をさまざまな形で展開することで,市民の一員としてその権利を擁護し,ノーマライゼーションの社会を実現しようとしている。

基準 4. 個別支援の実践は，利用者および家族の希望に基づき，関連した社会資源のみならず一般社会資源を含めた，統合した援助を図っている。

法人の理事には精神障がい当事者も参加しているようにユーザー本位に運営がされている。また,会員には当事者や家族の多くが参加している。また,一般地域資源との結びつきを重視しており,さまざまなイベントに精神障がい者も参加して生活の充実を目指している。

基準 5. 閉鎖的自己完結的ではなく，地域との結びつきやネットワークを拡げる活動である。

E-JAN には,市内の精神科医療機関や福祉事業所に加え,精神保健福祉センター,浜松市,浜松医大,聖隷クリストファー大学,福祉事務所,社会福祉協議会,教育委員会,発達障害者支援センター,その他町づくり系の NPO とのつながりなど,関係機関や市民の幅広い参加がある。地域性と市民性を基礎として,専門性,素人性,当事者性を取り入れた事業実施やネットワーク活動をとおして人や機関同士の交流が生まれている。さまざまな取り組み実績から,「2014 年度子どもと家族・若者応援団表彰（内閣府)」も受賞している。

基準 6. 利用者の自立を支える医療および他の社会サービスと結びつき，地域生活の QOL を高めるものである。

E-JAN が活動理念と市民性を調和させて活動し続けている理由はいくつかある。その一つはネーミングにある。団体名を「遠州精神保健福祉をすすめる市民の会」という「市民」を基本とした名称とし,遠州弁の「いいじゃん」（いいよね）と「E-JAN」の活動理念を組み合わせている。もう一つは経緯にある。活動当初から浜松医科大学精神科教授が参加し,大学も団体会員となっていた。また,浜松医科大学 2 代目の元学長が会長になり,社会的信

用を得ながら地域精神保健福祉活動を推進した。また,NPO 法人化することで,自主性,個別性,迅速性の特性を活かし,事業とボランタリーの中間に位置づくミッションベースの活動を展開している。そうして,市民が中心となった地域づくりの推進,地域のネットワーク化と地域資源の活用,新たな公共サービスの供給主体,自己実現や社会貢献の場の提供を行っている。こうして精神障がい者の地域生活を総合的に支援している。これらの取り組みから 2006（平成 18）年度精神科救急学会特別賞,2007（平成 19）年度ペパーミントウェーブ賞「ヤンセンファーマ特別賞」を受賞している。また,同年度,「日豪保健福祉協力」の共同研究の一環として行われた,メルボルン大学精神医学部門の Chee Ng 博士により「ベストプラクティスモデル」として視察を受け,「STUDY VISIT ON COMMUNITY MENTAL HEALTH IN JAPAN」にて報告されている。

市民性という点では,当事者が市民として,「あたり前に生活できる地域づくり」という点と,市民はもとより「当事者や家族,専門家も一市民として」活動に参加する点の両方を,合わせて「市民の会」としている。

基準 7．実践は，人材としての利用者および専門家を育成している。

E-JAN の活動の発端は,1995（平成 7）年から始まった「西遠地区精神保健福祉を実践する会」からであることは既に述べたが,設立当時の精神保健福祉士等は,それぞれの所属先で支援機関を立ち上げ,10 周年事業の前後で,緩やかに世代交代が始まっている。また精神保健福祉ボランティア養成講座の受講生から E-JAN の活動に参加した市民も,活動の一翼を担っている。中学校生徒調査,教師調査を経て,教師用のテキストを作成し,思春期メンタルヘルスリテラシーの基礎資料の作成も手がけた。現在この事業は,精神保健福祉センター・教育委員会連携の元,教員のための研修会を行っているが,精神疾患の早期発見のみで終わるのではなく,今後は,子どもたちや保護者のこころの健康の保持・増進についても対応することを目指していく。

また,交流会や体験発表会は当事者主体で運営され,それがモデルとなり,新たな協力者を得ている。

基準 8．歴史的に蓄積され検証されたものであり，現在も発展を続けている。

E-JAN の活動は,約 20 年の活動蓄積がある。設立の経緯や,現状は割愛するが,常に,法律や制度の狭間での地域課題を,周辺機関と協力しながら,時に人材を発掘しながら,継続し発展し続けている。

更に,活動を維持,発展させていくためには,財政的な課題があるが,2014（平成 26）年 12 月に,仮認定 NPO の認可を受け,強化をはかった。なお,2015（平成 27）年 12 月時点で,個人会員 220 名,団体会員 17 団体で構成されている。

Ⅵ　今後の展開と課題

浜松のような地方都市は,仕事・住居・医療や福祉・教育など,生活のほとんどを,同一地域内でまかなっている。お互いが,地域の中で提供しかつ,消費活動をしており,医療や福祉・教育などの面でも,相互に提供しあっている。医療や福祉・教育などの量と質が向上すれば,子どもや親など家族,知人,そして自分自身にも還元してくることになる。現在,E-JAN が関わった全ての取り組みや人の繋がりが,ソーシャルキャピタルとなって,地域に新しい循環の輪が広がってきている。行政と E-JAN（含む E-JAN に関わる人たち）の協働で展開さ

れている,自殺対策地域連携プロジェクト,子ども・若者サポートネット,発達障害児者支援体制整備検討委員会（現在は,発達障害児者支援推進委員会）,不登校児支援連絡協議会,ひきこもり対策検討委員会等の実践は,お互いの強みを出し合いながら,地域の精神保健福祉活動を進展させていく,新しいスタイルなのかもしれない。

また,市民や地域社会に,機関誌やホームページなどにより情報を提供し続け,いつでもアクセスが可能な状態にしておく必要があり,関心がある市民や当事者,家族・学生,専門家等が,自由に出入りできる企画（じゃんだらにぃ,絆 PJ,交流会,アイデアのタマゴなど）を実施し,アイデアを推進できる体制づくりと財源が確保できる体制づくり（認定 NPO・行政との共同）が必要である。更に,課題別に（児童虐待防止・不登校などの子ども支援の NPO をつくり,相互に連携するユニオンを作っていく。

精神保健福祉領域・リハビリテーションのノウハウや人材を,舞台裏にしまい込んでおくのではなく,地域の中での「顔の見える関係づくり」に転換させていくことが大切であり,「それぞれの立場や方法で,コミュニティの再生・維持発展に関わる必要があるのではないか。自分たちの地域課題は,自分たちで解決していくことで,地域や取り組みへの愛着と充実感が生じ,地域への帰属意識にもつながるのではないかと考える。

地域での取り組みは,まったなしである。刻一刻と状況は変化し,入口である「問い≒課題」と出口であるの「解≒実践活動」がループ状につながっていく。そのため,活動の理念と信念は,幾重にも問われることになる。行政や NPO,大学などの研究機関が協力し,役割分担していくことはもとより,市民・当事者・家族と協力し,地域精神保健福祉活動を推移していく必要がある。当地において E-JAN の活動は,市民・当事者・専門家のインターフェイス機能も備えている。

私たちの活動は,数人の有志の集まりから始まった。当事者にとって,地域にとって何が大切か話し合い,協力し合うことで賛同者が増えていった。しかし,活動は決して順風満帆なものではなかった。その時に,joyful を持とうとする心が,そして共に地域を変えていこうとする仲間がいたことを忘れることができない。

注

☆１）大場義貴：精神障害者の社会復帰における連携.（丹治光浩編）心理臨床実践における連携のコツ,星和書店,pp.127-160,2004.

２）伊藤泰治：だんだんの就業支援の歩み 10 年を振り返る. 精神障害とリハビリテーション,14；53-59,2010.

文献

1）岡田靖雄編：呉秀三著作集　第 2 巻. 思文閣出版,1982.

2）大場義貴：「コノ地ニ生キル幸セヲ」実現させる精神保健福祉のストレングス・ソーシャルネットワークづくり（地域福祉実践シリーズ 静岡県浜松市の実践). コミュニティソーシャルワーク,15；65-72,2015.

3）2015 年度日本精神障害者リハビリテーション学会総会資料,pp.23－25,2015.